



Title	北海道における社会地区設定に関する研究
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Issue Date	1953
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/78362">http://hdl.handle.net/2115/78362</a>
Type	article
File Information	F020_01.pdf



[Instructions for use](#)

北海道における社会地区設定に関する研究

## 目次

は し が き .....	1
一、 序 説 .....	2
二、 社会地区設定の方法 .....	4
三、 人の動きより見たる社会地区 .....	6
四、 心の動きより見たる社会地区 .....	21
五、 結 論 .....	29

## 序

社会地区の設定は行政的にも教育的にも色々の社会指導の爲にも必要であるし、社会生活の調査や研究もそれを利用して便益を得ることが多い。けれども社会地区の設定の方法は理論的にも技術的にも従来余り進められていない。ここに用いている方法は社会生活の現在における動きをそのまま促える事によつて社会的関連の地域的濃淡を知り、社会的に比較的独立した地域を区画しているものである。

この新しい方法は、技術的にもそれ程困難なものではないから、他府県に於ても容易に実施され得ると思う。

又、この方法によつてここで結論として得られている北海道七地区の区分は、現在の社会の動きに既して合理的に設定されているものであるから、色々の方面において大いに活用されることを期待してやまない。

本研究に対して色々の助力を惜まなかつた北大文学部社会学研究室関清秀助教授、笹森秀雄助手、学芸大学講師東谷清次講師及びその他同学の諸君に対し、ここに深甚の謝意を表するものである。

昭和二十八年十月八日

北海道大学教授 鈴木栄太郎

## 一、序 説

自然的社会的諸条件は各地域によつて異り、そこに居住する人々の素養もその数も相違する。斯くてそれらの諸条件によつて制約される社会生活の態様も相互に同質的ではあり得ない。われわれが社会地区の設定を行う基礎には各地域毎に異つた文化的な文化の型が存するであろうから、かくの如き文化的個性を拵つと思われ地域を重なる境脈を定め得べしと思われる点も存してはいるが、今ここで社会地区を設定することには地方的文化的個性という気は直接少しも尙題とされてはいない。

ここでわれわれが問題としているのは社会関係の累積度の地域性である。四つの聚落の内、AとCとの間には社会関係の累積が認められ、又BとDの間にもかくの如き関係があると認められる場合には、AとCとを一つの社会的統一とみなし、又BとDをも一つの社会的統一とみなし、かくてA及びCの一地区と、B及びDの一地区を区画しようと思ふのである。この研究の出発点は全くその点にある。

社会関係の累積の独立が一定地域内に認められるなら、恐らくそこには文化的な個性も認められるに相違あるまいが、かくの如き文化的個性が何であるかの問題はわれわれには第二の問題である。われわれは今ここではどの地域内に於て人は比較的頻繁に相接触し合つているか、その地域を他地域と相區別づける一線を探した事である。

甲の聚落の人々が持つてゐる社会的関係は恐らく無数の他聚落に及び、又時と共に絶えず変化もして行くであろうけれども、巨視的に観察すれば比較的少数の關係が累積している地域を見出すことは不可能ではないし、又絶えず変化しつつあるとはいつても、現在に視点を置けば余り遠くない過去と将来も推定できなくもない。

現在もし地域的に個性的文化がみられるなら、それは恐らく過去におけるその範囲内の社会的接觸の累積がそうさしているのであ

う。現在における社会的接觸の累積は今日以後における文化的個性の形成を促がすであろう。われわれが今調査するのは現在における社会関係である。それは現在以後における文化の地方的個性に關係するものであろう。

本調査の結果は、北海道を若干の地域に区分して考察したり設計したりする人に対して一つの規準となり得るものである。われわれはいまここで社会関係の比較的独立して累積している地域を求め、これを一つの社会地区として設定せんとしているものであることは既に述べた通りであるが、さてかゝる社会地区の設定に當つて問題となるのは如何なる視眼よりそこにアプローチしようかという点である。

されば次にわれわれは、地区設定の方法について述べるであろう。そのことを述べる前に一高次のことを考えてみたい。

凡そ人間の社会関係は一見無限に雜多で無軌道なようにも思えるが、しかしそうではない。一般の人間は定まつた住居を持つてゐるので彼の社会関係も大体一定の地域内の人々を相手にしてゐるものである。例えば十勝の住民の社会関係は勿論無数であるが、しかし大部分は十勝内の人を相手にしてゐるのであろう。一部分の社会関係は十勝の外部に飛び出している。しかし外部に飛び出すといつても、どこからでも飛び出すのではなく、自らそこには通路がある。鉄道と国道がその主なるもので、人はそんな通路によつてのみ外部の人と接觸する。よく考えてみるとそんな通路は幾らもない。それではそんな通路の外界への出口に立つてそこを通過するものを調べれば十勝の中に何が入つて来るか外に何が出て行くかを明らかたすることができる。通過するものは何であるか。人と物と通信による心であるといえるであろう。そこを通過する人と物と心の量と対比を知ることができれば、十勝の人々が社会的に接觸している相手の人々の土地が大体どの範囲かということを知ることが出来る。然らば通路を通る人と物と心の動きをよく調べてみれば、どの聚落の人々は他のどの聚落の人々と強い社会關係を持つてゐるか、その他のどの

の聚落とは殆ど無関係であるか知ることができる。ある町が他の或る町に依存している関係、いいかえれば或る町が他の町を支配している関係も人と物と心の動いている量と方向をよく見れば大体に知ることができる筈である。

## 二. 社会地区設定の方法

現実に動さつつある日常生活の中から、生きたる社会関係をありのままに捕捉する視点としては、次の三者をとり上げるならばその目的を達しうるであろう。

- (1) 人の動き
- (2) 心の動き
- (3) 物の動き

この三者は、そのいずれもが生きたる社会生活の動きを象徴的に担持するもので、社会的接觸の累積度を測定しうる簡明な要因であるが、ここでは更にこれらを総合的観点から把握し、それらの比較的集中累積している地域を以て一町の独立せる社会地区として設定しようと思う。

われわれがここで研究の基礎資料としてとりあげたものは次の如きものである。

(1) 「運輸発着表」 札幌鉄道管理局統計課作成  
 この資料は全道各駅の対駅別発着乗車券数を集計したもので、運輸省発行「鉄道旅客発着通過人員及び人荷月報」作成のための素表である。昭和26年度ノ年間における乗車券発着数の最高及び最低を示した昭和26年9月及び昭和27年2月の2ヶ月についてこれを分拆した。

(2) 「市外通話対地別距離通統計表」  
 北海道電気通信局運用部考査訓練課作成  
 これは、全道各電話局について昭和26年10月5日(年間にこの1日だけ全道にわたって調査を行った。)における市外電話の

対地別距離通数を集計せるものである。  
 (3) 「販路拡張のための卸売業態調査」(昭和27年度)

北海道商工部商務観光課作成  
 これは全道各市・支庁における卸売業者の岳目別仕入先、卸売先を調査したもので、その取扱金額及び数量の記載が不統一な点に難点があるために、われわれの要求を完全に満たす材料とはならないが、卸売物品を通じての各市町村の連結関係を知ることができる。われわれこれを必要に応じて社会地区の設定を補完する資料として用いた。

なお、物の動きに関する資料としては「主要貨物取別発着関係明細月報」(日本国有鉄道刊)及び「販路拡張のための生産品実態調査」(北海道商工部)を参照したが、前者は特殊岳目、しかも移動数量の多い岳目のみに関する調査資料であり、また後者は各市町村における生産量はわかるが、その流通関係が不明であるために、いずれもわれわれの研究目的には不適であるから、ここではとり上げないこととした。

次に実際の調査は次の如き要領に従って実施した。

- (1) 原則として調査は現在の支庁の境界線に最も近い聚落(駅又は局)から開始する。  
 本道においては行政単位である支庁管内が、歴史的にも現実的にも最も緊密な社会的統一体を形成しており、また支庁所在地たる聚落がその中心を形成していると推定して大きな過誤はない筈だからである。そこでわれわれは支庁の境界線を以て地区設定の第一の手がかりとする。
- (2) 次に支庁境界線上にある聚落(駅又は局)Aが、人・心・物のそれぞれの動きにおいて、最も集中的に依存している上位の聚落B・C・Dを発見する。
- (3) 次に聚落(駅又は局)B・C・Dが右三者においてそれぞれ最も集中的に依存している上位聚落(駅又は局)E・F・Gを発見する。

- (4) かくの如き操作をくりがえすことにより、人・心・物の動きにつきそれぞれ下位より順次上位にいたる聚落の社会圏を画し、これを以てそれぞれの社会地区として設定する。
- (5) 右の如くして設定された各社会地区は、量的に又質的にそれぞれウェイトが異なるはずであるから、最後に以上三者に基く総合的視点に立つて、均衡的に対応せる社会地区を決定する。
- (6) 以上の如き手続のみにて確定し難い場合には、現地調査を行い、
  - (イ) 右資料にとり上げられた時期の現象が年間を通じて恒常的なものであるかどうか。すなわちその時期に何か特殊なる事件があつて人及び心の恒常的動きが攪乱されていないかどうか。若し攪乱されているとすれば、恒常的な時期の動きは如何なるものであるか。
  - (ロ) その土地の住民の帰属意識、すなわちその地域の住民が一般にいずれの社会地区に属すると意識しているのが、或いはいずれに属するを可とするか。

この二点を明らかにすることに努めた。

原則として右の如き調査要領に従つたけれども、その結果は後たみる如く、人の動きと心の動きとはいずれの地域においても殆ど相一致し、われわれの研究方法の誤りでなかつたことが実証された。

### 三. 人の動き

前記の如き研究方法、基礎資料、調査要領に従つて、人の動きを分析したところ、以下に述べる如き結果となつた。

但し、駅の従つてその所在都市の支配、従属の關係はかゝる機械的操作のみによつて必ずしも決定せらるべきものではないので、多少の差はこれを無視し、他の事情も考慮に入れて、同格乃至は双方併せて一都市の機能を含むものと判定したところもある。

なお、これを理解し易くするために地図及び系統表を作成してみたからこれを参照せられたい。

(註) われわれが利用した基礎資料は、前述の如く昭和26年8月及び昭和27年2月の「運輸発着表」であるが、われわれの対象とした駅の乗車券最高発着駅は、両月間とも殆ど全く同一駅であつた。これによつてみると、人の動きの絶対量は夏季、冬季によつて変動はあるが、対駅別の相対的な動きは季節によつて左右されないことが明らかである。地域社会相互間の人の動きによる社会的接觸度はほぼ固定しているとみなしてよいのではなからうか。

なお、8月と2月との最高発着駅の同一ならざる駅に関しては、両月間の発着乗車券数を合計してその高位となる駅を以て第一位とした。

#### (一) 渡島支庁管内 (第1表及び第16, 17, 18表参照)

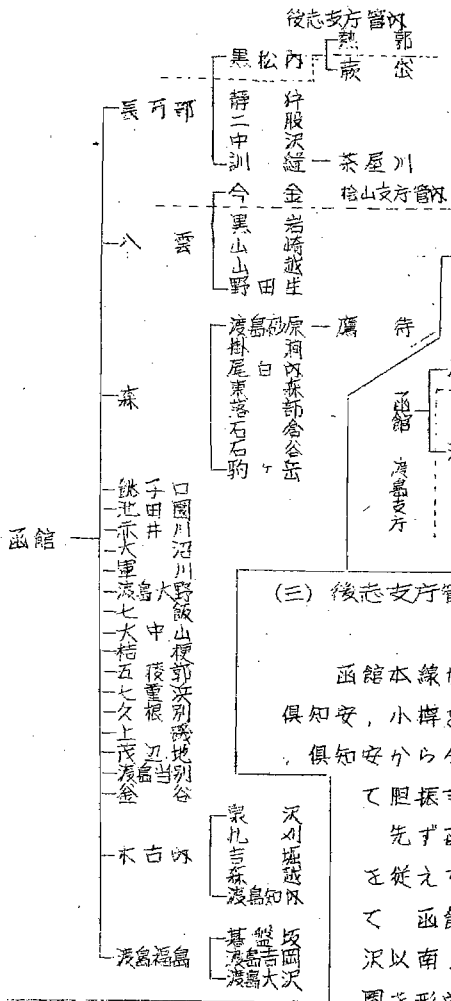
管内は函館本線が南北に貫通し、これに亀田からは江差線が、訓経からは瀬棚線がそれぞれ松山支庁管内へ、長万部からは室蘭本線が胆振支庁管内へ通している。

先ず後志及び胆振支庁界からみて行くと、函館本線二股、室蘭本線静狩は共に長万部に依存している。次に松山支庁界をみると瀬棚線の茶屋川は訓経更に長万部を介し、また江差線の吉塚は木古内を介しそれぞれ函館に依存している。函館が道内地方の中心を形成していることはこれによつても明らかである。函館と他の大都市との關係をみると第一位は青森で(第15表参照)第二位の札幌を2倍以上に引離している。又東京は第四位であり、札幌・小樽からの東京への順位はそれぞれ五位、その他の都市から東京への順位は格段の隔きを以つて低位にあるのに比較すれば、この地区は札幌に多くを依存する道内他地区とは可成り異つた形で本州方面と同運をもつていることがうかがわれる。

#### (二) 松山支庁管内 (第2表及び第16, 20表参照)

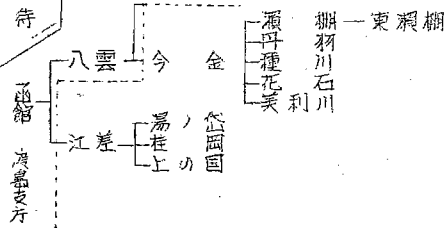
東隣の渡島支庁より入るのは南の江差線、北の瀬棚線の二つである。江差線は、江差が湯の岱以西の全駅を従え、瀬棚線では今金、美利川以西瀬棚に至る全駅を卒いて、更に渡島支庁管内の入雲を

第1表



介して、それぞれ函館に依存している。  
要するに、松山支庁管内は少くとも人の動きから判断する限り管内挙げて函館の社会地区に所属するものと判断される。

第2表



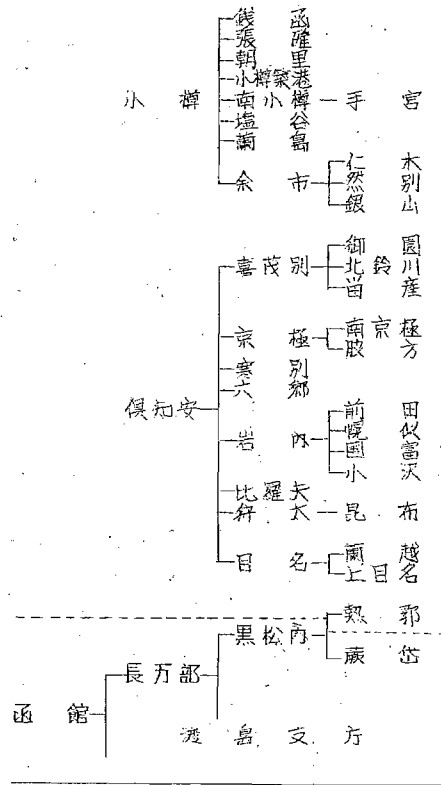
(三) 後志支庁管内 (第3表及び第18, 19, 20表参照)

函館本線が南方渡島支庁管内より入り、倶知安、小樽を経て石狩支庁管内に通ずる外、倶知安から分岐して羊蹄山麓を迂回南下して胆振支庁管内に入る胆振線がある。

先ず函館本線の黒松内は渡島、熱帯を従えて長万部に依存しており、従つて函館地区に属する。上目名以北小沢以南、及び胆振線網走以北は倶知安圏を形成する。銀山以北は余市を経て

小樽圏に属する。小樽圏は銭函まで延びてここで石狩支庁管内札幌圏と接觸する。なお支庁所在地たる倶知安の交通圏は管内の一部に止り、札幌、小樽への依存度が極めて高く、数字の上では僅に札幌が多いが、小樽、南小樽と合すれば小樽の方が多くなり、倶知安の

第3表



札幌又は小樽に対する依存度の強弱はたわかに断じ難い。又小樽の第一位は札幌であるが、札幌の第一位も亦小樽であり、その依存度も相互に極めて大きく小樽の札幌に対する数値が若干大であるが、さしたる差がない。このことは札幌・小樽両市が本来一つの都市として持つべき機能を分有しているものと解すべく、従つてこの所属する社会地区は札幌地区というべきであろう。

(四) 胆振支庁管内

(第4表及び第20, 21, 22, 23表参照)

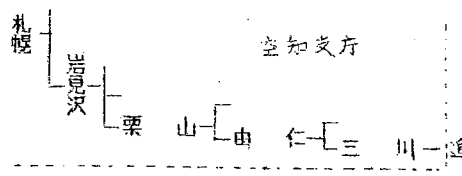
渡島支庁管内長万部より分岐して管内に入り、礼文を最初に東室蘭、苫小牧を経て早来を最後にして空知管内に

入り岩見沢に至る室蘭本線と、後志支庁より伊達紋別に至る胆振線、苫小牧より日高支庁管内様似に至る釧路線、室蘭本線沿の端より植苗を経て石狩支庁札幌に至る千代線及び支庁管内線として管内線がある。

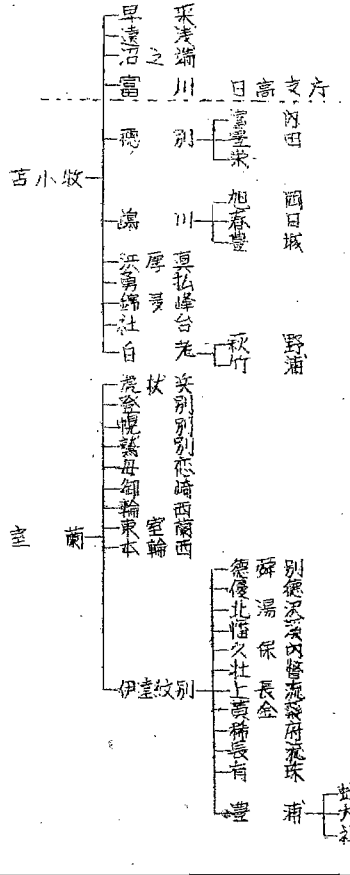
この管内は大きく分けて室蘭圏と苫小牧圏とに分かれる。すなわち西方長万部より管内に入ると礼文は豊浦を介し、更に豊浦は伊達紋別を介してまた胆振線の徳峠も亦同様伊達紋別を介して室蘭圏に属し、東方は虎杖沢迄が室蘭圏に属する。室蘭本線の礼文以東・早来以内、日高線は日高支庁管内の密川以西、及び千代線の植苗以



第4表



南は苫小牧圏に属する。また、管内線の各駅は穂別又は釧川を介して苫小牧に属している。而して室蘭、苫小牧の上級都市は札幌である。



(五) 日高支庁管内 (第5表及び第23, 24表参照)

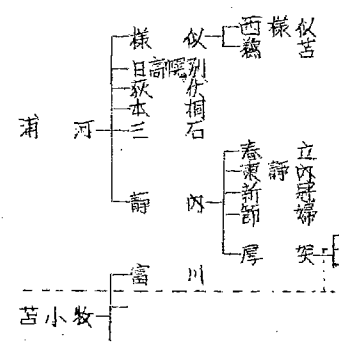
胆振支庁管内より入る日高線の第一駅富川は前記の如く苫小牧圏に入るが、次の駅日高門別はこの富川と厚狭への依存度においてほぼ同程度である。従つて漸移地帯とみなすべきである。厚狭以南最終駅樺皮逆は浦河圏を形成している。浦河の札幌直結はいうまでもない。

(六) 石狩支庁管内 (第6表及び第19, 20, 21表参照)

他支庁管内に通ずるのは函館本線、札幌線、千歳線の3線

- (1) 函館本線 西は軽川より東は江別に至る間。
- (2) 札幌線 管内中中小屋以南は勿論、終点空知支庁管内の浦臼

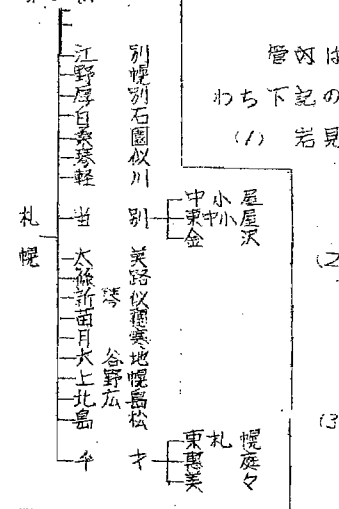
第5表



まで  
(3) 千歳線 美々以北  
以上の各駅はすべて直接、間接に圧倒的な依存率をもつて札幌圏に属する。なお札幌と小樽との関係については(三)後志支庁管内の項において述べた通りである。

たゞ、千歳町の中支笏湖周辺の地域(人口はごく微々たるもの)のみは王子製紙工場の軌道により直接苫小牧に出る。

第6表

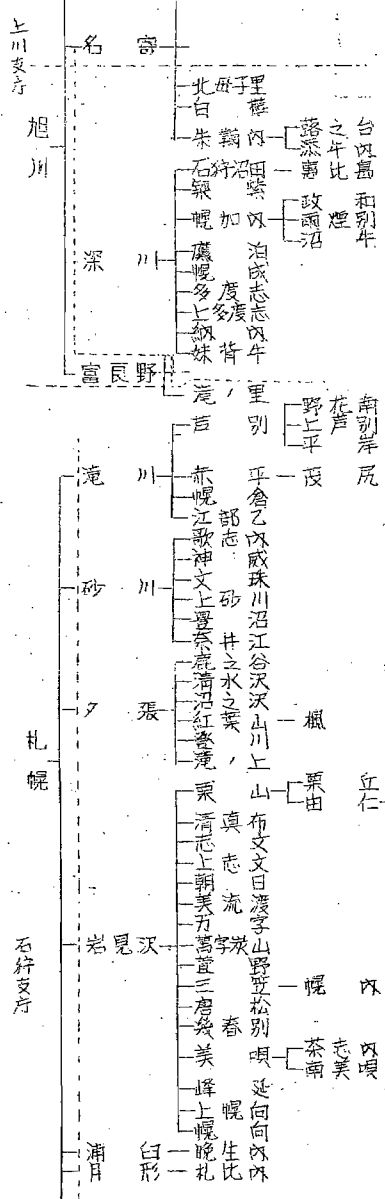


(七) 空知支庁管内 (第7表及び第19, 21, 22, 23, 24, 25, 26表参照)

管内は大きく分けて五つの圏に分かれる。すなわち下記の如くである。

- (1) 岩見沢圏 函館本線の幌向以東、茶志内以南、室蘭本線の安平以北及び万字線、袋春別線の全駅を従える。
- (2) 夕張圏 東方山間に全く孤立して狭小ではあるが(夕張市域のみ)独自の社会地区を形成している。
- (3) 砂川圏 函館本線の奈井江、豊沼、それに上砂川線、歌志内線の全駅を従える。
- (4) 滝川圏 函館本線の江部乙、根室本線の野花南迄を従える。
- (5) 深川圏 函館本線の妹背牛、網内、深名線の政和、留萌線の恵比島を結ぶ圏である。

上記の五者の中、前四者は何れも上位都市として札幌に依存する



が、深川圏のみは旭川に依存する。

右の圏内に属さないものとして

- (1) 丸沼線 凡形以北浦白迄は、直接札幌に依存する。
- (2) 根室本線 濃の里は富良野を介して旭川に依存する。
- (3) 深名線 添牛以北は朱鞠内、更に名寄を介して旭川に依存する。

(八) 上川支庁管内 (第8表及び第24, 25, 26, 27, 28, 30, 31, 32表参照)

管内の社会地区は南から富良野圏、旭川圏、名寄圏、音威者浜圏、誉平圏に分かれる他支庁から当管内に入る最初の駅をとつてみると

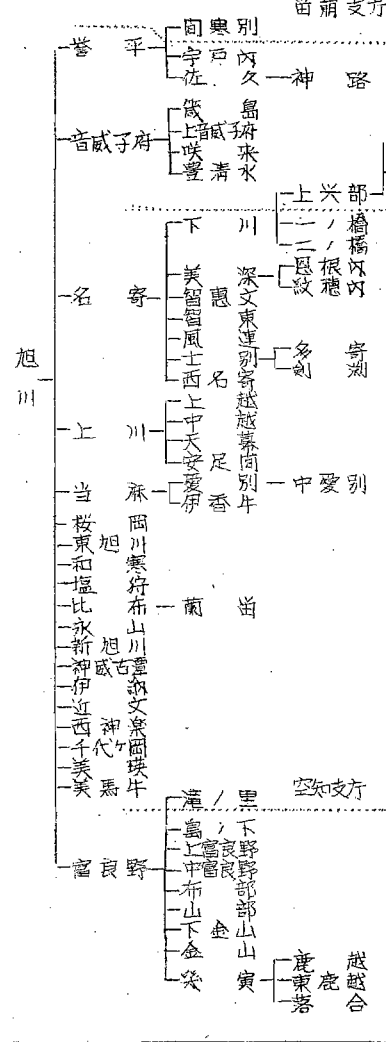
(1) 函館本線 神威古瀬は直接旭川に、

(2) 石北線 上越は上川を介し旭川に

(3) 宗谷本線 宇戸内は誉平を介し旭川に

(4) 深名線 初奈志内は名寄を介し旭川に

(5) 名寄線 一ノ橋は下川及び名寄を介し旭川に



(6) 北見線 上音威子府は音威子府を介し旭川に

すなわち直接又は間接に何れも旭川を上級都市としてその社会地区に属する。

なお旭川は札幌を上級都市とすることはいふまでもない。

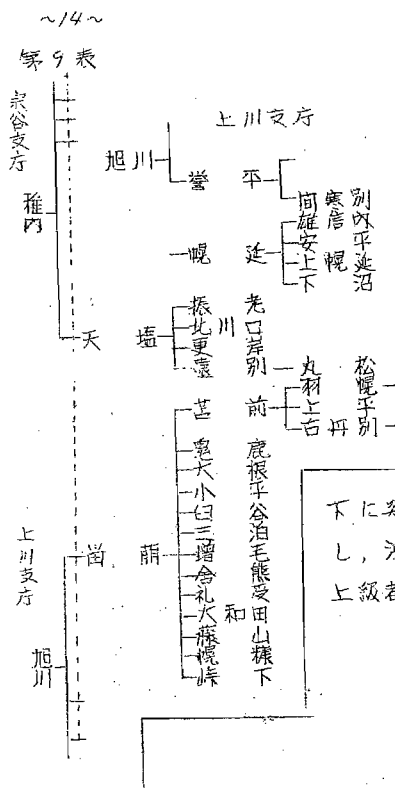
(九) 苗穂支庁管内 (第9表及び第25, 27表参照)

他支庁に接続する線は、函館本線深川駅より分岐して南方から入る苗穂本線と北方宗谷本線幌延から入る天塩線の二本のみである。上記の二線を連結することは多年の懸案であるが、未だに連絡がついていない。(遠羽線28年渡着工予定) 従つて社会地区も自ら二つに分かれている。南方の各駅のグループは一応苗穂を中心とする社会地区を形成しているが、苗穂は更に上級駅旭川と直結している。

次に南方圏は宗谷線、雄信内以北、下沼以西及び天塩線全区間を含む地域であるが、ここでは天塩が幌延、遠別を従えて一つの社会

地区を形成しており、天塩は更にかなり微弱な牽動力ながら上級都市稚内圏に属している。

なお、宗谷本線で上川支庁管内より入る第一駅同楽別のみは上川



支庁管内の準平を介して旭川の社会地区に漏入される。

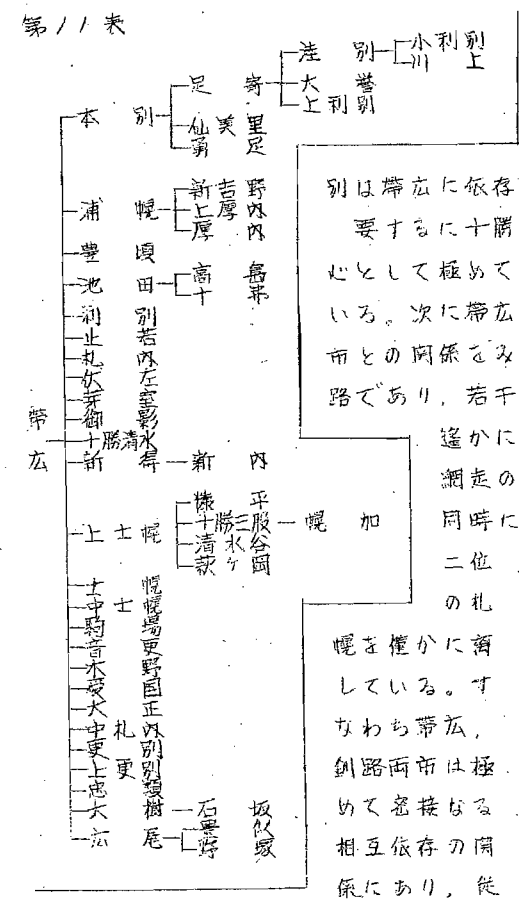
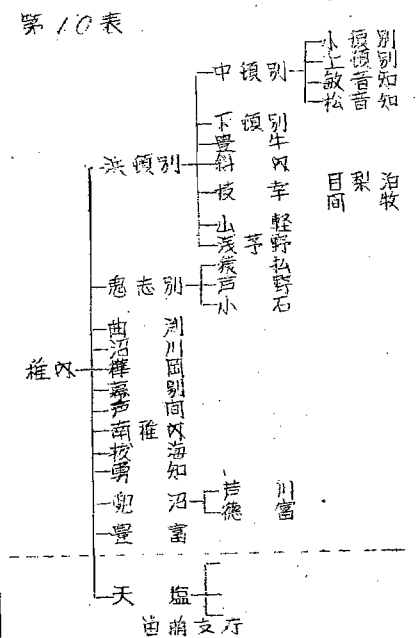
(5) 宗谷支庁管内 (第10表及び第27, 28表参照)

- (1) 宗谷本線 豊富以北
  - (2) 北見線 小浜別以北
- の各駅はすべて稚内を中核とする社会地区を形成している。その内部をやや詳細にみると、北見線の中浜別及び興浜北線の枝幸はそれぞれ傘下に幾つかの附近小駅を従えて浜頓別に属し、浜頓別がさらに牽引力としては弱いが高級都市たる稚内に属している。

(二) 十勝支庁管内 (第11表及び第32, 33, 34表参照)

上川支庁管内から入り釧路国支庁管内へ抜ける根室本線と池田から分岐して網走支庁管内へ出る網走本線とがある。

根室本線にて上川支庁から入る最初の駅新内は新得に、新得は帯広に、又釧路国支庁管内に抜ける最終の駅、厚内は浦幌に、そして浦幌は帯広にそれぞれ依

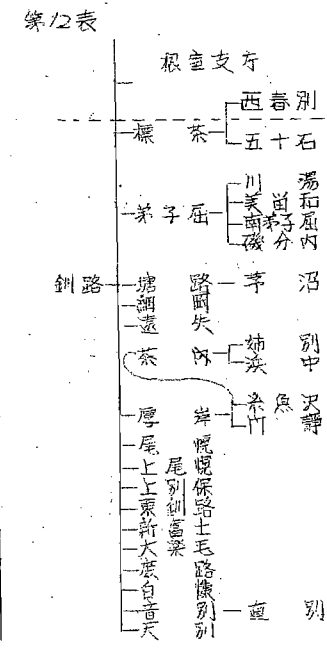


つて両者は同一の社会地区内に並存して、いわば二つの核心を形成しているとみなすことも可能であり、また他面においては両市は互に対等の地位において札幌に依存しているともいえるのである。

(三) 釧路国支庁管内 (第12表及び第32, 33, 34, 35表参照)

存関係を示している。網走本線最終の駅小利別は差別に、差別は足奇に、足奇は本別に、そして本別は帯広に依存している。

要するに十勝支庁管内はすべて帯広を中心として極めて緊密な社会地区を形成している。次に帯広の同列乃至上級に位する都市との関係を見ると、帯広より第一位は釧路であり、若干の差で札幌が続ぎ、次いで遠かに降つて旭川、小樽、北見、網走の順である。所で逆に釧路は同時にまた帯広を第一位とし、第二位の札幌を僅かに高めている。すなわち帯広、釧路両市は極めて密接なる相互依存の関係にあり、従



根室本線が十勝支庁管内から入って根室支庁管内に抜ける外、網走支庁管内に通ずる釧網線がある。根室本線最初の駅直別は音別に、そして音別は釧路に依存し、最終の駅姉別もまた釧路に依存している。釧網線最終駅川湯は茅子屈に、そして茅子屈は釧路に依存する。

なお、以上二線の外に標茶より分岐して根室支庁管内に入る標準線があるが、当支庁管内には駅がないのでここでは觸れない。

以上の状況より釧路国管内はすべて釧路市を中心とする社会地区を構成していることが明らかである。釧路と帯広、釧路と札幌との関係については前項において述べた如くである。(第15表参照) なお釧路からの第三位以下は小樽、旭川、網走、北見の順で続いており、内陸都市帯広が等しく内陸都市たる旭川、北見との社会的接觸が多かつたのに比べて、海産釧路がやはり海産たる小樽、網走との接觸が多い点は甚だ興味ある事実を示している。

(三) 根室支庁管内 (第13表及び第33、35表参照)

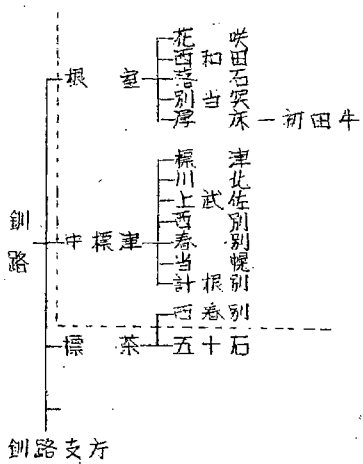
ともに釧路国支庁管内より入る根室線と標準線とがある。

(1) 根室本線 厚床以東はすべて根室に依存する。

(2) 標準線 最初の駅西春別のみは釧路国管内の標茶に依存し、計根別以東は中標津に依存している。中標津はまた厚床に至る線路上の春別、西別をも従えているが、その上級都市としては、支庁所在地の根室ではなくして他支庁の釧路に依存している。

根室依存圏は根室本線厚床以東の駅数を算するのみで、根室は支庁所在地とはいいいながら又釧路の社会地区に依存している。従つて根室支庁管内は挙げて釧路を中心

第13表



とした社会地区に編入されるわけである。

(四) 網走支庁管内 (第14表及び第28, 29, 30, 31, 34, 35表参照)

他支庁管内と通ずる鉄道交通路は、南は釧路に至る釧網線、池田に通ずる網走本線、西は旭川に至る石北線、名寄に通ずる名寄線の4本である。

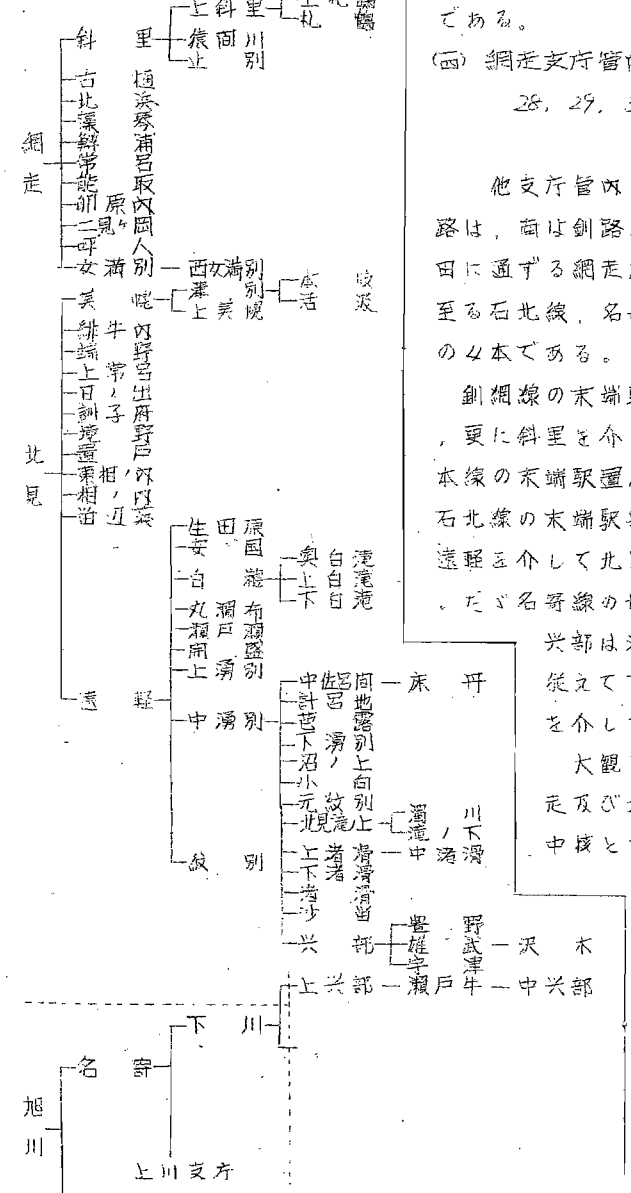
釧網線の末端駅上札幌は上斜里、更に斜里を介して網走に、網走本線の末端駅蘆田は直接北見に、石北線の末端駅奥白滝は白滝更に遠軽を介して北見に依存している。だが名寄線の場合その末端駅上

興部は瀬戸牛、中興部を従えて下川、さらに名寄を介して旭川圏に入る。

大観してこの地域は網走及び北見をそれぞれの社会地区の中核とする二つの社会地区に分れることになる。そこでこの両市の関係をみると、相互に圧倒的な数量を以てそれぞれ第一位を占め合

つて、両者の地

第14表



位が対等なることを示している。この両者は相互に補完し合いつつ一体となつて初めて全網走支庁管内の核的機能を果しているわけである。

第15表 (鉄 道)

大社会地区の中心都市

着 駅	函 館	小 樽	札 幌	旭 川	稚 内
函 館		1,276 1,794	3,834 8,316	307 474	216 759
小 樽	1,218 2,000		23,452 27,902	850 1,415	199 345
札 幌	2,674 4,838	28,156 42,533		6,476 9,100	663 797
旭 川	1,196 1,428	6,628 10,073			576 858
稚 内	191 340	744 1,152		473 775	
帯 広	409 696	1,295 3,464		473 634	11 27
釧 路	445 545	2,261 3,097		232 623	28 38
北 見	181 305	1,222 696		558 774	16 27
網 走	130 240	735 1,038		269 423	13 53

(注) 東鉄管内は管内の全駅を含むが、東京が殆ど全部を占める。

(五) 要 約

以上考察してきたところを最も要約的に表現したものが第一図「鉄道旅客より見た地域区分」図である。すなわちこれを参照してみると、北海道はそれぞれが中核的聚落(地図上では◎印で示される)をもつ45箇の小社会地区に分たれる。そしてこれらの小社会地区の中核聚落はまたさらに上位の聚落に依存している。この依存関係を地図上に矢印をもつて示してみると、結局それは函館、札幌、小樽、旭川、稚内、北見網走、帯広、釧路の各都市(地図上◎印で示され

なお、両市の上級に位する都市は明らかに札幌ではあるが、網走の釧路に対する、又北見の旭川に対する依存関係も軽視することのできない差をもっている。(第15表参照)

相互間の切符発売枚数

帯 広	釧 路	北 見	網 走	青 森	東 京 (東鉄管内)
137 305	214 453	61 50	70 108	9,407 11,521	1,039
310 541	458 734	113 217	115 198	158	938
2,038 2,407	2,133 7,290	849 1,293	613 870	238	3,805
470 705	354 633	542 767	277 457		
9 21	13 21	13 13	24 23		
	2,137 2,915	255 602	54 206		
1,349 3,433		261 377	356 432		
236 538	299 462		2,965 7,711		
59 194	337 473	3,042 5,105			

る)を中核とする7箇の大社会地区に区分されることとなる。そして札幌は、これらの中核諸都市がさらに従属する、最上位のいわゆる中央都市として、北海道において特殊的地位を占めているのである。

なお、地図にみるごとく、若干の空白地帯を残しておいたが、この地帯は必要に応じて近接地区に編入しうる地帯と考えてよいであろう。

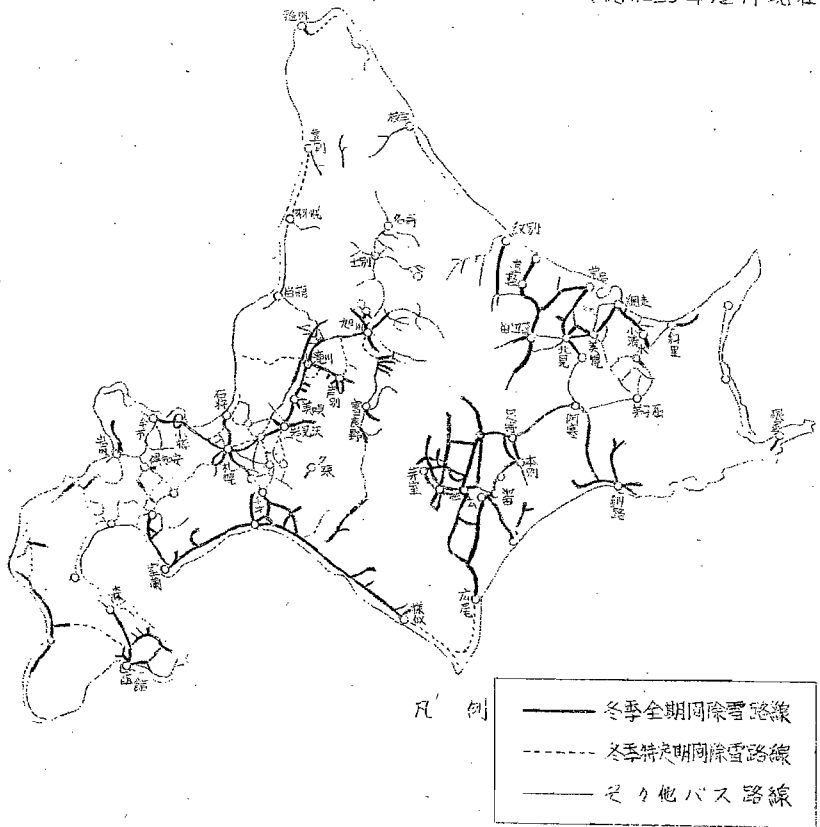
(附) バス交通路線

本道における昭和24年度のバス乗客数は 35,360千人で、これ

を国鉄（軌道）乗客数106,958千人に比べると約その3分の1を占める。勿論比較的近距離のものが多いので人件に直すと国鉄に比較してその利用度は未だかなり低い。しかし近時発展が著しく交通機関としては極めて有力なものとなりつつあり、その運転巨額も飛躍的に延長し、今や支庁管内を越えて運行されるものも生じている。

上記の状況を図上に示してみると下図のごとくである。

第三図 北海道バス路線図 (昭和25年12月現在)



資料 北海道科学技術連盟 — 北海道現勢図譜解説書 —

による。

この図によつてバス交通路の主たる結節点と思われるものを探せば、(1)函館 (2)室蘭・苫小牧 (3)札幌 (4)旭川 (5)帯広 (6)釧路 (7)北見等である。大体において先に調べた鉄道乗客の集中点と合致するが、室蘭、苫小牧地区が札幌より比較的独立の体裁をなせること及び稚内地区が未発達の状態におかれている点で注目される。

### 四. 心の動き

前項において試みたるごとき人の動きの調査方法に準じて、心の動きを分析した。

すなわち、全道内各電話局について基局Aの市外通話において最も通話数の多い局がどこであるかを決定する。調査の結果それがB局であることが分れば、B局について同様の調査を行う。然るにB局の市外通話として最も通話数の多い局はC局であつたとする。

A局との通話が全部の内で余り多い方でないことが明かにされたとすれば、A局はB局の従属的位置にあり、B局はC局の従属的位置にあると認める。

かくの如き方法による調査の結果を各支庁別に示すと次の通りである。

(一) 渡島支庁管内 (第56表及び第52, 53表参照)

長万部、入雲、森はそれぞれ附近の末端局を従えて、また他の局は悉く直接に、函館に依存する。

なお、函館は札幌に依存する。

(二) 釧路支庁管内 (第37表及び第51表参照)

北部の各局は今金、瀬棚及び大樽に、南部の各局は江差に一応集中するが、これら4局は亦いずれも函館に依存する。久遠及び宮野の2局は函館に直結している。

(三) 後志支庁管内 (第38表及び第54, 55, 56表参照)

管内は南から寿都、根室安、岩内、余市、古平をそれぞれ中心とする5地域に分かれる。その中寿都は函館に、他はすべて小樽











、部分的に出入はあるが、大局的には幾々たるものに過ぎない。また小社会地区の中心も、若干の例外を除いては両者概ね相一致することは地図（第一図及び第二図）にみるごとくである。これを以てわれわれのつた方法の大過なかつたことは明らかであろう。従つて、社会関係の現状に基づいた地域区分としてはこれで十分と思われるのである。

このような現実的な社会関係の累積は、これらの地区における住民の日常生活様式を規範し、またやがては将来における文化的個性の形成にも影響を及ぼすこととなるであろう。従つてわれわれが社会設計の立場から計画的に社会を造り上げて行こうとする場合、すなわち現実には地域開発計画を遂行せんとする場合にも、ここに設定された社会地区は計画樹立のための社会的地域的単位として、充分に考慮されるべきものであることを信じて疑わないものである。

（註一）われわれは一般に社会的地域区分を試みる場合には次の3点を考慮しなければならないであろう。

- (1) 設定された地域が余りにも広狹不統一でないようにすること。
- (2) 相近接した地域よりなるべく統一すること。
- (3) 決定された地区の数が、例えば5～10のごとく適度であること。

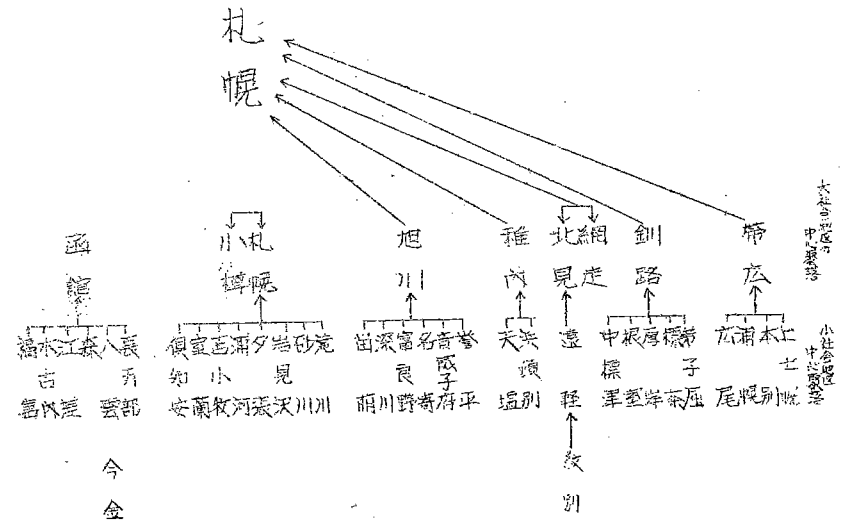
これらの条件を念頭に置き、又物資の流通関係をも顧慮して、われわれの地域区分を総合的に考察するとき、たとえば稚内地区は旭川地区に編入して一体とし、道北地区とすることが望ましいであろう。（物資の流通に基づく都市の相互依存関係については、第83表以下にみるごとくである。すなわち、稚内地区は鉄道及び通信関係よりみるときはいずれもその第一位は札幌市であるが、この地区を独立の一単位として考えるには、他の地区と比較するときや、均衡を失する感がないわけではない。そこで、この地区を近接する他地区、すなわち旭川地区若しくは北見・網走地区と一体として考えようとする場合、物資の流通関係による依存度を以てそのいずれに属

するかを決定する指標とすることができらるであろう。すなわち、旭川市の卸売業者の稚内地区に関係するものは108であるに対して、北見市のそれは3、網走市のそれは0である。物資の流通よりなる社会関係の接觸よりみれば稚内地区は殆ど全く旭川市の勢力圏内に属するものとみなしてよいであろう。）

（註二）第一図及び第二図に基づいて、鉄道及び通信よりみたる大社会地区及び小社会地区の中心聚落を列挙してその従属関係をみると第50表及び第81表の如くである。すなわち大社会地区の中心は両者共に9で完全に一致する。小社会地区の中心は前者34、後者30で、両者の一致するもの2（江差、森、今金、八雲、長万部、倶知安、室蘭、苫小牧、浦河、夕張、岩見沢、砂川、岫蘭、深川、名寄、音威子釧、天塩、浜頓別、紋別、遠軽、根室）に及び、すなわちわれわれの方法の大過ないことを知ることができる。

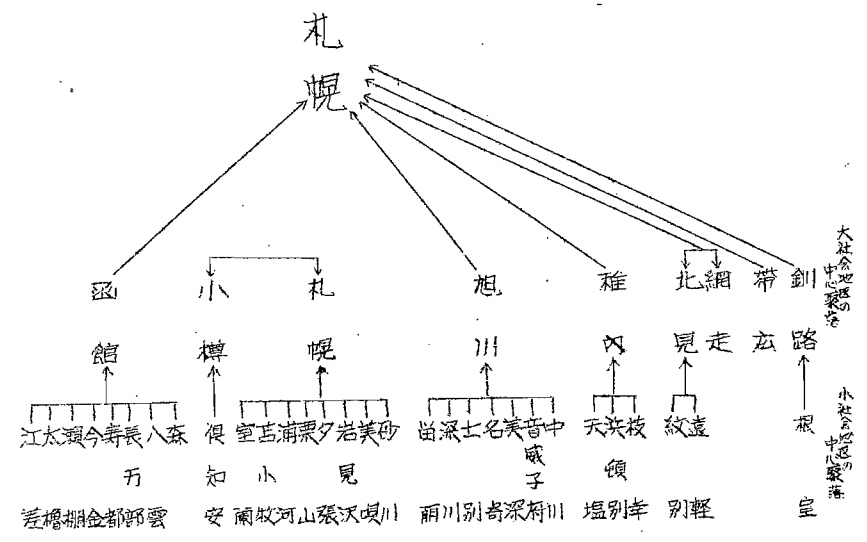
第80表

鉄道旅客より見たる社会地区の中心聚落及び  
その従属関係

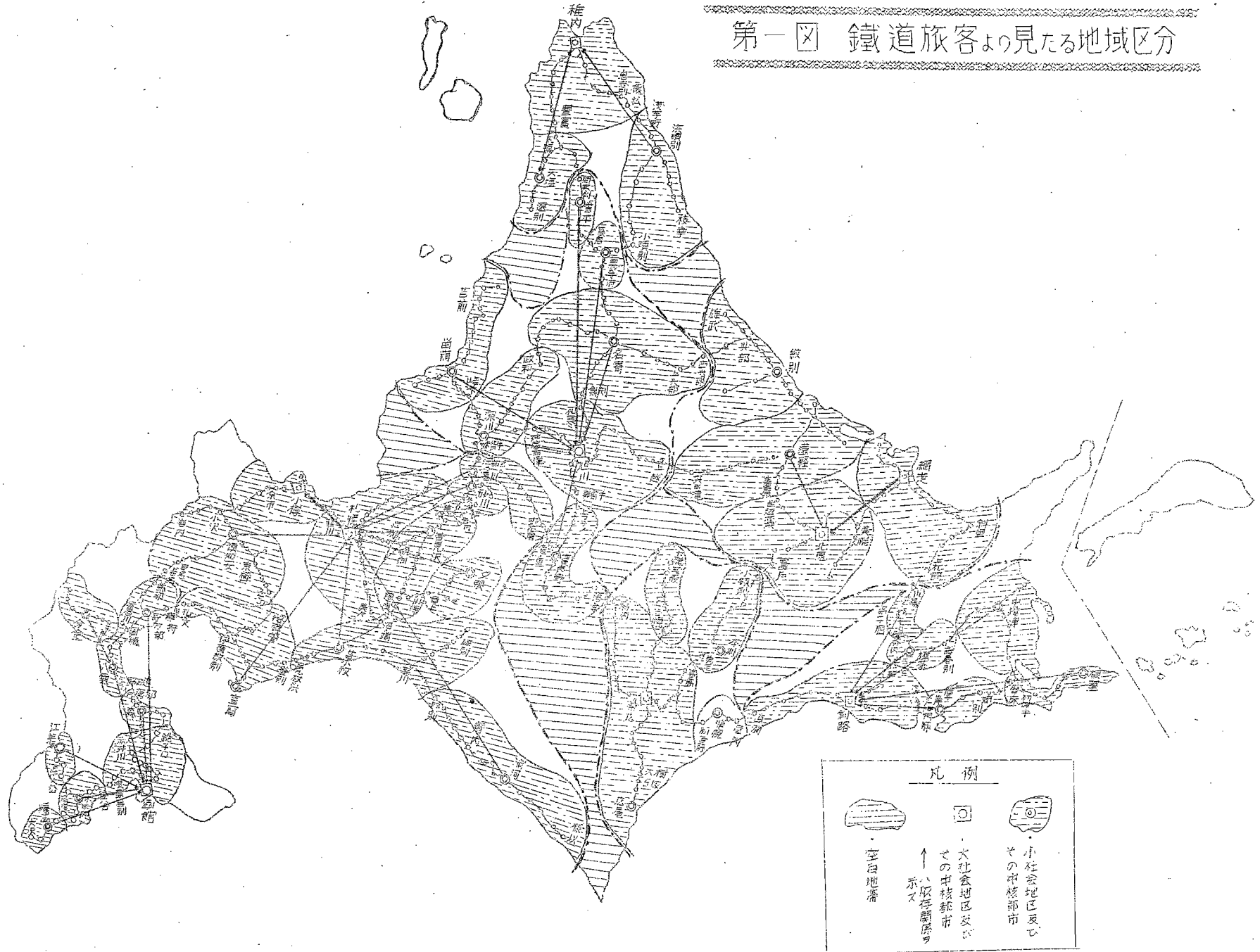


第81表




通信より見たる社会地区の中心聚落及び  
その従属関係



第一図 鐵道旅客よりの見たる地域区分





凡例

		
大社会地区及びその中核都市	示す	小社会地区及びその中核都市

## 第二図 通信より見たる地域区分



 大社会地区とその 中核都市	 核都市	凡  例
↑印は依存関係を示す		





























第 55 表

備懸	登極	豐持	神木	儀和安	糸市	小禰	北俣	若内	喜茂別
中目	13	8		5	6				
南			107	87	250	197			
野	31	27		45	41				
廣				19	38				
野			54	27	19	14			
野			6	2	17	13			
野	9	16	3	4	4	2	9	7	5
野			18	22	20	31	27	20	12
野					36	43	11	8	4
野			73	6	10	11			5
野					28	28	11	13	5
野			3	0	2	3			19
野					7	0	3	1	13
野									9
野					15	25	7	6	5
野			20	23	27		11	57	48
野	20	37					12	56	44
野									50
野									34
野									23

第 56 表

餅	神	湯	小禰	若内	洞	神懸内	珠内	儀和安	小沢	仁木	糸市	古平	美園	入柳
内			1	3	12	8	1	2						
内			2	3	30	25	2	3						
内			3	3	11	9	13	9						
湯			10	5	8	57	48	3	4	4				
桑			6	4	30	34	4	8	7	9	8	1		
前			3	6	18	18			7	5	4	1		
岩			34	40	113	103			54	70	25	86	18	12
内														
内			22	17										
木														
仁														
稻														
倉														
石														
山														
銀														
井														
赤														
余														
別														
塚														
野														
入														
善														
吉														
平														
余														
市														
谷														
塩														
樽														
小														
蘭														
銭														
文														

第 57 表

	水	堰	小	梅	石	符	每	田	石	棚	湖	江	基	岩	見	又	大	售	十	裁	惠	庭
輕	37	58	78	11																		
山	123	290																				
溪	32	32																				
山	1386	890																				
石	22	75			10	8																
花	64	75	12	17																		
石	7	9																				
望	7	3																				
高	18	74	10	12	9	8																
復	33	38																				
條	4	74																				
大	31	53	8	9																		
石	5	3																				
符	1	1																				
當	42	32	2	1																		
別	45	37	4	4																		
山	36	30																				
屋	4	8																				
別	20	27																				
嶺	31	32																				
高	3	8																				
學	80	87	11	13																		
松																						
庭																						
處																						
別																						

第 58 表

	水	堰	岩	見	沢	月	形	浦	白	粟	沢	粟	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山
形	49	34	78	43																			
内																							
白	9	6	9	16																			
同	2	3	8	9																			
向																							
村	6	0	26	17	3	2																	
文	4	0	20	0																			
志	3	3	10	14																			
流	14	11	31	21																			
字																							
田																							
仁	18	19	18	11																			
古	33	33	10	73																			
北																							
長	5	5	4	5																			
川	25	22	36	24																			
班	44	38	37	27																			
春	54	39	38	37																			
別																							
山																							
岩	170	180																					
見																							
沢																							
野																							
内	9	7																					
炭	52	35																					
山	13	73																					
倉																							
比																							
内																							
新																							





表 63 続

川	札幌		登川		西小牧		崎川		門別		川平		取		日高		内		内		内		河	
	川	内	川	内	川	内	川	内	川	内	川	内	川	内	川	内	川	内	川	内	川	内	川	内
川	6	4	3	3	5	12	24	26	10	11	16	20	23	24	4	3	12	20						
取	8	4	3	3	5	5			10	11	16	20	23	24	4	3	12	20						
内	4	2			4	2			3	4	10	7	11	13			13	12						
内	4	2			5	3			3	4	10	7	11	13			6	5						
高			1	3	2	1					8	7	6	5			13	8						
都					2	1			4	10	3	1					13	8						
都									12	13														
都	14	17	3	8	17	15			76	83	20	17												
内	5	6			12	9																		
内					4	2																		
内																								
川			3	10	15	15																		
河																								

表 64 続

川	札幌		西小牧		内		内		内		内		内		内		内		内		内		内		内		
	川	内	川	内	川	内	川	内	川	内	川	内	川	内	川	内	川	内	川	内	川	内	川	内	川	内	
川	15	17	3	3	1	0	20	16	24	20	12	8	9	10	3	4	3	3	19	13	3	3					
内			1	0	27	25													3	1							
内					27	29																					
内					17	10	14	7																			
立	5	3	5	3	15	8	11	8																			
石					5	1																					
相																											
水	6	5			3	1																					
舍					2	1																					
似																											
吉																											
澤																											
取																											
川																											
河	50	54	38	31			35	30				35	38														
河																											









表 71

北	見	盛	堅	若	住	甘	菜	稲	走	中	置	戸	相	内	小	水	桑	属
42	60															130	165	
44	42															25	66	
34	30															53	45	
22	15	7	8	10	13											57	62	
28	23	1	1			35	44									74	83	
26	30					2	3	4	3							44	44	
32	31					2	3	4								42	45	
37	23					4	1									46	30	
7	5	1	6			4	1			13	11					34	26	
11	10					3	1			1	1					16	13	
52	35					3	1									57	32	
5	5															17	12	
18	12															24	19	
3	2	3	2	4	4	3	4									6	13	
14	4					2	2									34	20	
13	8									5	2					24	13	
28	8															30	10	

表 72

北	見	網	走	小	水	菜	懐	相	生	下	置	止	到	古	櫻	津	別
12	16	54	66	9	11												
38	25	10	16			24	29	13	10								
10	9	33	23			22	18										
16	15	47	50			6	1		5	9							
6	7	28	35														
15	4	20	11														
4	1	13	9														
8	8	25	17														
7	7	1	2			25	19										
7	7	18															
3	3	1	1			4	5										
			18	16													
1	2																
1	2	9	15	17	27												
		5	8														
2	2	20	15														
						7	10										
4	4	32	31														
3	1	13	7	8	15												















表 8.7

茨城県市内在の町の農業岩別町別

地区	市内在の町の農業岩別町別							計
	盛岡	水戸	宇都宮	前橋	上野原	高崎	桐生	
茨城県	2	1	1	1	1	1	1	8
水戸市	1	1	1	1	1	1	1	7
宇都宮市	1	1	1	1	1	1	1	7
前橋市	1	1	1	1	1	1	1	7
上野原市	1	1	1	1	1	1	1	7
高崎市	1	1	1	1	1	1	1	7
桐生市	1	1	1	1	1	1	1	7
その他	2	1	1	1	1	1	1	9
計	10	7	7	7	7	7	7	61
盛岡市	2	1	1	1	1	1	1	9
水戸市	1	1	1	1	1	1	1	7
宇都宮市	1	1	1	1	1	1	1	7
前橋市	1	1	1	1	1	1	1	7
上野原市	1	1	1	1	1	1	1	7
高崎市	1	1	1	1	1	1	1	7
桐生市	1	1	1	1	1	1	1	7
その他	2	1	1	1	1	1	1	9
計	10	7	7	7	7	7	7	61

188